

八月随

浜田空

風は心を逆撫で。毛羽立った枯野の精神一本一本の立ち様がコンパスに。針先から負を纏った光線を僕から伸びる影として現在に統合した。雪だるま式で積み重なるデマゴーゴスの出鱈目廃墟。手触りや色々は翳る気持ち。闖入した闇と今を建築する。その向けられた無機質な針の穴に静脈を通すことは可能なのだろうか。職人は生涯を払ってもわからないと笑った。僕も石ころ感情蹴飛ばして廃墟を東京に笑い飛ばした。

うだる夢の滴りはやがて石を穿ち川となる。賽で君は歪んだ札束を積み格別のレットルを身につけ商品になった。何が重なって餓鬼の植えた畑に葉が実る。僕は地獄を私物化する。疎開するようにヒッチハイクをした。出会う人皆生きていた。でも戦場は地獄は僕は今も終わっちゃいない。

自由すぎて何もかも可笑しい。全ては布上の物語。赤子は羊毛でござわと僕をくすぐる。麻の時間は世界の毛羽立ちを愛苦しく。絹っぽいドキュメントは艶やかな戦場をかき消して。感じ始めれば有り余る地平に情緒はふわりと崩れ瓦礫がやさしく僕をくるむ。

吹いて飛んだ繊維の目を覚まして血を注ぐように陽を編む。僕より先に目を覚ましていた感情に僕をかたどる。背負うにはあまりに昏い世界を纏う。投函された手紙を朝焼けに燃やした。蓬々と立ち上がる感情が白けた未来の頬をマーマレード色に染め部屋に差し込む。その朝があまりに美しいので体を貫かせてそこで終わりにする。